

四国はわが国でも有数の低開発地域であるという。生産所得の伸び方一つをとってみても、40年対35年が1.62倍で、全国の2.09倍に对しかなり下回ったものになっている。そして、その間において、14万7000人・3.5%の人口が流出をした。四国は低開発地域であると同時に過疎地域でもある。地形的にみて山地が多く平野が少ないこと、気象的にみて“台風銀座”の異名をたてまつられるほどの台風常襲地帯にありながら、いたずらに風水害のみを繰り返すだけであって、水利用に関する本格的な開発が遅れていたこと、天然資源に乏しいうえ、唯一といってよい森林資源も、一般道路、林道等の立ち遅れのために、十分な開発が行なわれ得なかったこと等々の原因に加えて、本土と一衣帯水の間でありながら海をへだてた離れ島であるということが、四国という島の開発の上に大きなハンディキャップとなってきたことは否むことのできない事実であろう。霧がかかっても、風が吹いても船がとまる。もちろん飛行機もとばない。年平均70回におよぶこの隔絶は四国における近代的産業立地の上にとってはもちろんのこと、四国4県400万人の住民にとって、日常生活そのものの維持に関する問題でさえあつてきた。戦後におけるわが国産業経済の著しい発展は、太平洋ベルト地帯という新しい一大工業地帯を生み出した。その太平洋ベルト地帯が京阪神をこえ、瀬戸内海沿岸にも、一つの新しい工業地帯を延長しつつある。気象的に瀬戸内海沿岸は降雨量が少なく、古くから製塩業の栄えた地域である。その製塩業も製塩方式の変換によって広大な塩田を必要としなくなつてきた。塩田の跡地利用とあわせて、各所に行なわれつつある埋立による土地造成が、工業立地のための新たな土地を提供しようとしている。一方、寡雨地帯であるこの地域における農業および生活用水の不足は、古くから幾多先人の努力による多数の溜池（香川県だけでも2万カ所）の築造にもかかわらず、根本的な水問題の解決にはほど遠いものとして幾多の水飢饉、水争いの歴史を続けてきた。その水不足もさる昭和41年6月妥結をみた吉野川総合開発計画の樹立によって、早明浦ダムに貯わえられた吉野川の水が池田、新宮ダム等の取水施設とあいまって、高知、香川、徳島、愛媛の4県に分水され、吉野川の利用率は30%から一挙に50%にはね上がるとうしている。その他、重信川支川石手川における石手川ダム、仁淀川本川における大渡ダムも既に着工され、渡川、那賀川等における多目的ダムの構想とあわせて、四国4県内における水需給に関する前途はきわめて明るい。四国は低開発地域であり、かつ過疎地域の一つであることは先に述べた。低開発を論じ、過疎を論ずる場合、その対策はいろ

* 正会員 建設省四国地方建設局長

いろあろう。特に近年大きな社会問題となつてきた過疎は、都市における過密と全く裏腹の関係においてこれを論じなければならない。35年から40年の間に四国から流出した14万7000の人口はそのほとんどすべてが京阪神地域に流入し、比較的土価の安い大阪市周辺に定着し、いわゆる都市のスプロール化の一因をなしているという。大都市における貴重な労働力源として産業経済の発展を支えてきたこれらの人々に対する受け入れ体制の整備は都市対策上の大きな課題となっている。過疎を押えることは、過密を押えることである。農山村における農業改善事業による農林業そのものの転換、大型化、機械化、協業化等、学校、医療、厚生施設等の整理統合、農業協同組合、森林組合の拡充、日常必需品流通機構の整備等々、行なわなければならない幾多の施策があろう。しかしながら、そのいずれをとってみても、要は、人と物の交流が、すなわち交通がいかに早く、安く、便利に行なわれうるかの問題である。過疎対策の中で道路交通対策の占める位置が、いかに決定的、支配的なものであるかを考えなければならない。戦後、漁業の形態が著しく変つたという話を聞く。南方洋上でとれた鮭や鱈が室戸漁港に陸揚げされて、保冷車に積み込まれて、京阪神、さらには東京まで走るのである。名神高速道路に続いて先般、東名高速道路が開通したために、室戸の魚が一日早く市場に着けるようになったという。漁業は、一方では“とる漁業から”つくる漁業に転換しつつある。瀬戸内海沿岸における、はまち、くるまえば等の海水魚介類、吉野川、那賀川流域等におけるうなぎ、あゆ等淡水魚の養殖が盛んになってきた。これらの生産物は、従来からの蔬菜、園芸生産物とともにきわめて鮮度と市況とに支配される商品である。幹線自動車道とあわせて本四架橋によせる農漁民の願いがここにもあることを知るのである。四国の空は美しい。水はきれいである。四国の風光は正に明媚である。瀬戸内、室戸、足摺、宇和島等の海岸美、石槌、剣山等の山岳美、屋島、四国八十八霊場、松山、丸亀城等の名所古蹟の数々、自然美を中心とした四国の観光資源はその数の多いことと同時に、未開発さを残す魅力である。将来におけるわが国三次産業の残された宝庫の一つとして、その開発にあたって慎重の上にも慎重でなければならない。四国の開発が遅れているということは、反面、より高度の開発の可能性を残すと同時に、すべての開発を十分な調査と計画と検討の上で立つて、バランスのとれた理想的なものにすることができる可能性を秘めているということである。

調和のとれた開発、美しい自然をよごさない開発、四国の開発を考えるにあたって、すべての人々に課せられた課題である。